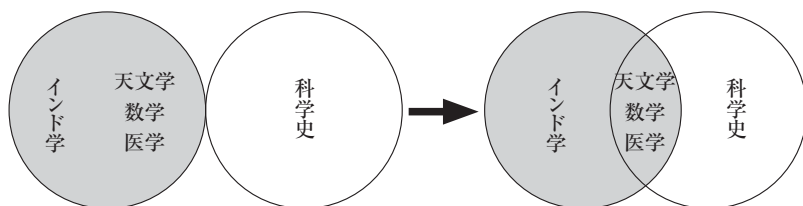


科学史からみたインド文化

矢野道雄

1 はじめに—インド学・科学史・文化交流史—

わたしは「インド学」と「科学史」という二つの専門分野をもっている。下の図のようにこれらの分野は最初は接点がわずかしかなかったが、研究が進むにつれて、重なる部分が拡がり、わたし個人のなかでは「インド科学史」という分野が、あらたに形成されつつある。さらに近年になって、大学で文化交流史の講義を担当するようになったので、「交流と比較」という観点¹でもインド科学史を考えるようになった（下図）。



1-1 恩師たち

わたしがこのような専門分野をもつようになるまでには、さまざまな恩師との出会いがあった。まず最初にサンスクリット文法を学んだ大地原豊先生とその尊父・大地原誠玄氏の名前をあげたい。大地原先生は自らを「サンスクリットの職人」と称され、あらゆる分野のサンスクリット文献に関心を示しておられたが、なかでも誠玄氏の残された医学・天文学の文献を通じて、わたしにインドの科学文献への関心を芽生えさせてくださった。また私が3年生のときには善波周先生に『チャラカ・サ

ンヒター』を読んでいただいた。この書物の重要性を知ったのは、当時、玄米菜食運動の指導者として心酔していた桜沢如一先生のおかげである。大地原誠玄氏の『スシュルタ本集』の遺稿を出版するにあたって、大阪大学医学部の丸山博先生との縁ができ、「アーユルヴェーダ研究会」の発足にも参加した。

次の大きな転機は藪内清先生との出会いである。先生からは国際的に通用するアジアの天文学史研究の意義を教えていただき、これを追求するためにアメリカのブラウン大学大学院数学史科に留学した。そこではとくにDavid Pingree, Otto Neugebauer, E. S. Kennedy, Gerald Toomer氏など4人の碩学から多大の影響を受けた。以上のような恩師たちに出会うことがなければわたしの現在の研究はありえなかったことを最初に断っておきたい。

2 インド科学を見る目

2-1 「サンスクリットの発見」以前—金星の太陽面通過—

インドの科学はウィリアム・ジョーンズの「サンスクリットの発見」以前にもヨーロッパの学者の関心を集めていた。

パリ天文台員ル・ジョンティ(Le Gentil, 1725-92年)は金星の太陽面通過観測のためインドのボンディシェリーへ行った。この現象は、近年では1761年6月の後は、1769年6月、1874年12月、1882年12月、2004年6月にのみ起こったまれなものであった。

1761年にはじめて地球上の各地で同時観測が行われた。とくに重要なのは、視差により太陽と地球の距離を決定することであった。当時ボンディシェリーはイギリス軍の手に落ちていたが、後にフランスに返還された。ル・ジョンティは1768年にインドに戻り、翌年起こるはずの金星の太陽面通過を待った。ところが6月3日の予定の時刻になって突然雲が現れ、観測は不首尾に終わった。しかし、待機中にル・ジョンティは、土着の天文学を調査していた。

半世紀後に、イギリス人のウォーレン(Warren)大佐が南インドで広く精密に調査し²、数字は南インド独特のkaṭṭayādi法で表され、貝殻を用いた計算法によって作成された天文表は、すべて韻文で文章(vākya)化されていることを報告した³。

2-2 最近流行の「インド式算数」について

インドは1990年代初めの貿易自由化以来、経済が目覚ましく発展した。とくに、情報産業が発達し、その背後にあると思われる数理科学が注目を浴びるようになった。とりわけインドが得意とするのはソフトウェア部門であり、この面ではもはや世界をリードしていると言っても過言ではないだろう。そのようななかで、インドの数学がにわかに注目をあびるようになり、数学教育とITとの関係が取りざたされるようになった。

ここ2、3年に刊行された「インド式算数教育」や「インド式計算法」に関する書物は、おびただしい数になっている。しかし、それらの中には現状や歴史的な背景を必ずしも正しく伝えているとは言えない言説が多い。たとえば、インド人は 19×19 までの掛け算表を暗記しているとしばしば言われるが、これについてインドの知人に尋ねてみると、ある人は 16×16 まで、他の人は 12×12 までしか覚えなかったという。また最近の私の調査では、 10×10 で十分という人も多かった。本来10進法では「九九」で十分なはずである。

最近「ヴェーダ数学」という言葉がひとり歩きし、インドでは「ヴェーダ時代」から現在評判になっているような数学が盛んであったかのような印象を与えることがあるが、これも歴史的にみて正しいとは言えない。このような不確実な情報はかえって、インドの科学やIT産業の社会的・教育的背景に関する評価を誤らせることにもなるだろう。

2-3 いわゆる「ヴェーダ数学」について

インドの算数や数学に関する通俗書では「ヴェーダ数学」(Vedic Mathematics)という言葉がしばしば用いられているが、この言葉自体は20世紀に生まれたものである。Jagadguru Swāmi Śrī Bhārati Tīrthajī Mahārājaという高校の数学の先生が著した*Vedic Mathematics* [Delhi 1965]という書物が、この言葉のもとになっている。

よく出される「インド式計算法」の例は

$$25 \times 25 = 625$$

$$65 \times 65 = 4225$$

などであるが、これはとくに「インド数学」と呼べるものではなく、わたし自身この計算法は中学のときに数学の先生から教えられて感心し

た覚えがある。

*Vedic Mathematics*には計算を簡単に行うための様々なテクニックがサンスクリットで表現されているが、これはヴェーダ固有の数学というわけではなく、数学好きの先生が編み出した簡易計算法にすぎない。たとえば *Nikhilam* と呼ばれる方法は次の通りである。

88×95の場合	この方法が成り立つ理由
$\begin{array}{r} 88 \quad (100-) \quad 12 \\ \times 95 \quad (100-) \quad 5 \\ \hline 88-5 \qquad \qquad \qquad 12 \times 5 \\ \hline \text{または } 95-12 \qquad \qquad 12 \times 5 \\ \hline 83 \qquad \qquad \qquad 60 \\ \hline \text{答 } 8360 \end{array}$	$\begin{aligned} ab &= (100-a')(100-b') \\ &= 100^2 - (a'+b')100 + a'b' \\ &= 100(100 - (a' + b')) + a'b' \\ &= 100(a-b') + a'b' \\ &[\text{または } = 100(b-a') + a'b'] \end{aligned}$

「インド数学の魔法」ではないことは明らかである。

2-4 インド学としての科学史—サンスクリットの発見—

1786年カルカッタで「アジア協会」(Asiatic Society) 創立3周年を記念してウィリアム・ジョーンズが「インド人について」講演した。とくに次の言葉はしばしば引用される。

サンスクリットはその古さはどうあろうとも、驚くべき構造をもっている。それはギリシア語よりも完全であり、ラテン語よりも豊富であり、しかもそのいずれにもまして精巧である。しかもこの二つの言語とは、動詞の語根においても文法の形式においても、偶然つくりだされたとは思えないほど顕著な類似をもっている。(略) それらは、おそらくもはや存在していない、ある共通の源から発したものと信ぜずにはいられないであろう⁴。

ジョーンズ自身1783年7月にカルカッタへ向かう船のなかでカルカッタで行う調査対象を16項目あげているが、そのなかに、「アジアの算数と幾何学、混合科学」「インドの薬学と化学、外科、解剖学」がある。実際かれはインドの暦法に関する論文も残している。

その他黎明期のインド学者たちの中で科学史研究の点でも重要な人物の名前をあげておこう。

- ・ コールブルック (H. T. Colebrooke) : パースカラ II の数学書『リーラーヴァティー』と『ビージャガニタ』の英訳。
- ・ バージェス (E. Burgess) : 『スールヤシッダーンタ』の英訳。
- ・ ウェーバー (A. Weber) : ヴェーダの暦法の研究。
- ・ ヤコービ (H. Jacobi) : 天文学と暦法による年代学研究。
- ・ ケルン (H. Kern) : 『占術大集成』(*Brhatsamhitā*) のテキスト出版と英訳。
- ・ ティボー (G. Tibaut) : 『シュルバ・スートラ』の研究。

3 インド科学のにないて

3-1 『アタルヴァ・ヴェーダ』の医学

インドの最古の科学的な活動の一つである『アタルヴァ・ヴェーダ』の医術には、アーリア的要素と非アーリア的要素が混在している。第4のヴェーダとみなされるようになったこのテキストの中心をなすのは呪法であり、呪文や護符によって平安を祈願するものである。とくに病気を除去するための呪法が多く、インド医学の起源をここに見出すことができる。その医学知識は、必ずしもアーリア人がインド亜大陸に持ち込んだものばかりではなく、病名や薬草名などには土着の要素が多い。それらはバラモンたちによって「アーリア化」され、「サンスクリット化」されてアーリア人の叡智（ヴェーダ）と見なされるようになったのである。

3-2 バラモン vs. 非バラモン

呪術中心の医学は時代とともに合理的な医学体系にとって代わられるようになる。その結果生まれた2大古典医学書『チャラカ・サンヒター』と『スシュルタ・サンヒター』には、共通する点が多いのは当然であるが、いちじるしく異なる点もある。よく知られているように『チャラカ・サンヒター』と『スシュルタ・サンヒター』の決定的なちがいは、後者が外科的治療法について詳しく述べているのに対して、前者は外科についてほとんどふれていないということである。そのほか地域性による薬物のちがいや、諸地方の水に対する評価のちがいも見られるが、基本的な医学理論そのものに大きな差があるわけではない。

『チャラカ』はタキシラを中心とする西北インドで成立したアートレーヤ学派の医学が紀元後3-4世紀にまとめられたものである。いっぽうの『スシュルタ』はその学祖といわれるダンヴァンタリがカーシー地方の王であったという伝承が示すように、インド中東部において成立したものである。ダンヴァンタリは紀元前の人物であろうが、現在のテキストは紀元後4-5世紀に編纂されたものだろう。

アートレーヤ系の医学が、徹頭徹尾内科の治療を重んじ、医者 of 倫理を強調し、いかにもバラモン的であるのに対し、ダンヴァンタリ王系統の医学はクシャトリアとの関係が密接である。このことは「外科」に当る原語「シャルヤ」が元来「^{やじり}鏃」の意味であったことからみても明らかである。また『スシュルタ』には軍医に関する章（第1巻第34章）がある。

『スシュルタ』は次のように外科を位置付けている。

およそ病気には外科的手術によって治療できるものと、油剤などの薬物によって治療できるものとの2種類がある。外科的手術によって治る病気に油剤などの薬物療法を行ってもかまわないが、逆に薬物で治るはずの病気に外科手術は行われない（1.24.2）。

したがって『スシュルタ』は「外科学書」というわけではなく、バラモン的倫理観からは扱いきれなかった外科の治療法を治療体系のなかに取り入れたところにその特徴がある。

アートレーヤ学派はダンヴァンタリ学派（dhanvantarīya）の医学の存在を知っており、たとえば痔の治療に関して『チャラカ』は次のように述べている。

ある人々はメスで切除することが痔に有効であるといい、ある人々は腐食剤によって焼くことが、ある人々は焼灼法によって焼くことが有効であるという。たしかにそれら3種の治療法は、よく勉強し、知恵があり、治療経験豊かな医者によってよく為されるであろうが、その場合でも失敗とかひどい痛みが起り得る。（略）しかしわたしは簡単な方法で、失敗もほとんどなく、痛みも伴わない治療法を、痔を根本から消滅させるために語ろう。（「治療の巻」第14

章34-37節)。

そのような外科的治療の方法についてはダンヴァンタリ系の医者が権威であり、かれらは切開・消毒・癒合に熟練している」(「治療の巻」第5章43節)

『チャラカ』においてはバラモンの価値観が優勢なのにながら、『スシュルタ』には非バラモンの価値観を取り入れる姿勢が見られる。地域的・社会的背景からもわかるように、『スシュルタ』のほうが仏教の価値観に近い。しかし、医学においてもバラモンの価値観が時代とともに支配的になり、『スシュルタ』はその影響力を失っていった。これは仏教がインドから消えていったこととも軌を一にする。これら二つの医学の系統を統合したのが、第3の古典医学書『アシュターンガ・フリダヤ・サンヒター』である。

3-3 『シャールドゥーラカルナ・アヴァダーナ』の社会的背景

仏教文献『ディヴィヤ・アヴァダーナ』の一部をなす『シャールドゥーラカルナ・アヴァダーナ』には、紀元前後のころのインドの天文学と占星術に関するテーマが多く含まれており、科学史の観点からも貴重な情報を与えてくれる⁵。

物語は今生の物語と前世の物語の2部に分けられる。おもな登場人物は次に示す通りである。

今生物語	前世物語
仏弟子：アーナンダ	マータンガ族の王トリシャンクの王子：シャールドゥーラカルナ
マータンガ族の娘：ブラクリティ	バラモンのプシュカラサーリンの娘：ブラクリティ

今生では、差別されているマータンガ族の娘ブラクリティが、差別を否定する仏弟子アーナンダに思いを寄せるが、前世では、ブラクリティはバラモンの娘であり、彼女を息子のシャールドゥーラカルナの嫁にと求めるのがマータンガ族の王トリシャンクである。

被差別部族(今でいう指定部族)の王トリシャンクが披露するバラモン批判の一部を和訳しよう。

このようなバラモンのプシュカラサーリンの言葉を再び聞いて、

マータンガ族の王トリシャンクは次のように言いました。

灰と金製品には違いが認められますが、そのようにはバラモンとその他の種姓に違いはありません。明るみと暗闇には違いがありますが、バラモンとその他の種姓にはそのような違いはありません。(略)

バラモンは母胎から生まれるものであり、チャンダーラも母胎から生まれるものです。優れているとか劣っているとかということになにか理由があるのですか？ (略)

マントラで清めて殺された山羊は天国へ行くというのは、肉を食べたいバラモンたちによって作り上げられたことです。もしそれが天国へ行く道なら、どうしてあのバラモンたちは自分、または縁者をマントラによって清めて殺さないのでしょうか？ 母を、父を、兄弟を、姉妹を、はたまた息子、娘を、妻を、あの再生族たちはどうして清めて殺さないのでしょうか？ (略)

これは恐ろしい心根のバラモンたちが抜け道として思いついたことです。家畜の肉を食べたいかれらが、清めて殺すことを思いついたのです⁶。

このように痛烈なバラモン批判を展開した後、トリシャンク王は天文学・占星術・医学・植物学に関する豊富な知識を披露する。このような知識は当時ではバラモンの独占物であったはずである。王自身はその知識を次のように「前世で学んだ」と言っている。

さてマータンガ王のトリシャンクは王子のシャールドウーラに、前世で学んだ諸ヴェーダを教えた。すなわち、その補助学(アンガ)とウパーアンガ、秘教、語彙と語義、音節の分解、5つめのイティハーサ、その他の諸学術、ダルマに即した注釈、ヴェーダの誓戒の言葉を⁷。

ここで言う王にとっての「前世」とは、仏教に改宗する前のバラモンであったときではないかと、私は推測している⁸。

4 外来要素

インドの科学史では外来要素も重要である。天文学・占星術では『ヤヴァナ・ジャータカ』の散文訳が紀元後150年頃に西インドで成立し、270年頃の韻文訳が現存している。その後アールヤバタが紀元後500年頃『アールヤバティー』でインド古典天文学を完成させ、ヴァラーハミヒラが550年頃『占術大集成』と『プリハツジャータカ』で占星術体系を確立した。

4-1 『ヤヴァナ・ジャータカ』

「ヤヴァナ」はイオニアに由来する言葉である。のちにはイスラーム医学がインドに導入され、「ユナーニー (Yūnānī)」と呼ばれるようになったが、この言葉も同じギリシア語が起源となっている。

『ヤヴァナ・ジャータカ』は占星術書としての「ジャータカ」文献の嚆矢である。著者はヤヴァネーシュヴァラ (Yavaneśvara, 「ギリシア人の王」) と呼ばれ、西インドにあったギリシア人植民地の王であったと思われる。

この書および後のヴァラーハミヒラの占星術作品には、ギリシア語の術語の音訳が数多く見られる。たとえば「ホーラー」(horā) はギリシア語でもほとんど同じ発音であり、「ホロスコープ」という言葉の「ホロ」はここからきている。インドでは占星術の特殊な術語の一つでもあるが、「ホーラー・シャーストラ」のように広く「ホロスコープ占星術」という意味でも用いられる⁹。

また占星術の内容も地中海地方で流行し始めていたものである。なかでも惑星と曜日と十二宮の概念は『ヤヴァナ・ジャータカ』によってインドに伝えられて、またたくまに広まっていった。

4-2 『ラーマーヤナ』より

『ラーマーヤナ』の冒頭に、ラーマの誕生の時の天体の様子が次のように描かれている。

それから12ヶ月目のチャイトラ月の第9日に、[月の位置する] 星宿がプナルヴァスであり、また5つの惑星が [いずれも] 自分の高

揚位に位置し、[東の地平線上に] 懸かったかに宮にある木星が月とともに上昇しつつある時、ヴィシュヌの化身としてすべての世間の人々に尊敬され、すべての吉相をそなえたラーマを、カオサルヤー妃が生んだ（岩本裕訳『ラーマーヤナ』、平凡社東洋文庫を多少改訳）。

ここでは明らかに西方起源のホロスコープ占星術が前提となっている。ここで用いられている「高揚位」(ucca) はギリシア占星術の基本概念の一つであり、その逆の「失墜位」(nīca) と合わせると下表のようになる。

惑星はそれぞれの「高揚位」にあるときその力を最も発揮し、「失墜位」のときその逆になる。すべての惑星をその「高揚位」に置くことによってラーマのホロスコープを理想的なものとして作り上げようとしたものである。しかし、水星が太陽からこのように離れた位置にあるはずがなく、このホロスコープは天文学的にはありえないものである。しかし興味深いのは、ほとんどこれと同じアイデアが中世ペルシア語で書かれた『ブンダヒシュン』のなかに「世界のホロスコープ」として見られるということである。こちらは世界の誕生を理想的なホロスコープによって示そうとしたものである。両者はあまりにもよく似ているので独立に成立したものとはみなしがたい。なお「世界のホロスコープ」で対角線上に配置されている「ゴージフル」はドラゴンの頭と尾であり、インドではそれぞれ「ラーフ」(羅睺)「ケートゥ」(計都)と呼ばれるものである。

表 高揚位と失墜位

	高揚位	失墜位
太陽	おひつじ宮 10°	てんびん宮 10°
月	おうし宮 3°	さそり宮 3°
火星	やぎ宮 28°	かに宮 28°
水星	おとめ宮 15°	うお宮 15°
木星	かに宮 5°	やぎ宮 5°
金星	うお宮 27°	おとめ宮 27°
土星	てんびん宮 20°	おひつじ宮 20°

ラーマのホロスコープ

しし おとめ 水星	かに 木星 月	ふたご おうし 太陽 おひつじ
てんびん 土星		
さそり いて	火星 やぎ	金星 うお みずがめ

世界のホロスコープ

しし おとめ 水星	かに 木星 水 地	ふたご おうし 太陽 おひつじ 金星 うお みずがめ
てんびん 土星		
さそり いて	火星 やぎ	

5 ヴァラーハミヒラの視点

6世紀半ばにアヴァンティ地方で活躍した博学者ヴァラーハミヒラはゾロアスター教徒の末裔でありながら、占星術の知識によって宮廷に仕え、「バラモン」とまで呼ばれるようになったという興味深い人物である。その価値観には通常のバラモンには見られないものがあるが、西方の占星術に関して次のように述べている。

ギリシア人は野蛮人であるが、かれらの間でもこの学問は正しく確立しており、かれら〔占星術師〕は聖仙のごとく尊敬されている。天命を知るバラモンはなおのこと¹⁰（『占術大集成』2.14）。

5-1 王宮占星術師のマニュアル

ヴァラーハミヒラが著した『ブリハット・サンヒター（*Brhatsaṃhitā*、矢野・杉田訳参照）は当時知られていた占いを集めたものであり、百科全書的な趣があり、インド文化を知るのにきわめて便利な文献となっている。そこで扱われている主題を要約すると次のようになる。

- ・**気象** 雲の懐胎の特徴、胎児の保持、初雨、風の輪、にわか雨、薄明薄暮、四方の空焼け、地震、流星、太陽の暈、虹、蜃気楼、幻日、天鼓
- ・**王の生活** 穀物のホロスコープ、物価、武器、プシュヤ宿の日の沐浴、冠、刀、身体、あざ、建築学、地下水脈探索、樹木の医学、神殿、金剛接骨、神像、入林儀礼、神像安

置、衣の破れ、払子、日傘、媚薬、香合わせ、宝石鑑定、真珠、ルビー、エメラルド、灯火、齒木

・鳥獣占い 牛、犬、せきれい、鶏、亀、山羊、馬、象、犬、ジャッカル、牛、カラスの鳴き声

・人相 男性、五種類の王、乙女、女性賛美、ひとに愛される方法、男女の愛し合い方、ベッドと椅子

・月と27宿 ローヒニー宿と月の合、月とスヴァーティ宿の合、月とアーシャーダー宿の合、星宿に適する仕事、ティティと主宰神、カナナと主宰神、誕生星宿による性質、アガスティヤ(カノーブス)、北斗七星、星宿による亀甲状分類、星宿の分野、星宿人間

・宮と惑星(新しい要素) 太陽、月、火星、水星、木星、金星、土星、羅睺、計都、惑星の分野、惑星の戦争、月と惑星の合戦、「惑星の年」の果、惑星の三角形

これを見ると、占星術が宮廷にとってきわめて重要な学問であったことがわかるだろう。いわば現在の先端的科学・技術のような役割を果たしていたのである。

6 アル・ビールニーの視点

科学史の視点からインドを見ると、ヴァラーハミヒラと並んで重要なのがバベルシア系の博学者アル・ビールニーである。かれの『インド誌』¹⁾はガズナ朝のマフムードのインド遠征に随行して見聞したことから、連行してきたインド人学者たちから得た情報を記録したものであるが、その客観的な叙述態度は近代のインド学を先取りするものであると言える。この名著のほかにも、『ヨーガストラ』のアラビア語訳をはじめとして、インドに関する作品は約20編ある。青年期にギリシア科学の洗礼を受けながら、後半生にはインド文化に大きく傾斜し、両文化とさらにイスラーム文化を冷静に比較することができたビールニーは比較文化論の先駆者であるとも言える。ほかに『年代学』『天文宝典』『星学入門』などの著作がある。

以下にかれの言葉をいくつか引用して、締めくくりとしたい。

6-1 『インド誌』より

6-1-1 学問の口承性について

インド人たちには、古代のギリシア人たちのように、羊皮紙の上にものを書く習慣がない。ソクラテスはどのように本を書くことをしな

いのかと尋ねられて、「わたしは知識を生きた人間の心臓から死んだ動物の皮に移したりはしない」と答えた¹²。

6- 1- 2 韻文について

かれらの書物のほとんどはシュローカ（韻文の一種）で書かれている。インド人のためにユークリッドの本と『アルマゲスト』を翻訳するために、またアストロラーベの作りかたの作品をかれらに書き取らせるために、わたしはその練習をしている¹³。

6-2 『占星術教程の書』より

アル・ビールーニーは占星術の入門書『占星術教程の書』を著している¹⁴。

占星術の基礎には天文学と宇宙論があり、それらの基礎には数学があるという観点から、まず数学から説き起こすという、教育的な配慮が見られる。ここにもインドに関する興味深い情報が含まれている。

6- 2- 1 幾何学と算術の基礎

ここではユークリッド幾何学とインド計算法を融合している。10進法位取り表記とゼロの使用については次のように言う。

どの位にもまったく同じ数を置くと、先行するものは常に後続するものの10分の1である。もしその位に数がない場合は、空位を示す記号がその場所を固める。われわれはそのため小円を用い、それを「シフル」（ṣifr）と呼ぶ。インド人は点を用いる。

6- 2- 2 天文学・宇宙論と暦法—宇宙の無限性と有限性—

八つの天球の背後にあるものはなにか。人々の中にはその背後に第九の不動の天球を認めるものがある。それはインド人たちがかれらのことばで「ブラフマ・アンダ」、すなわちブラフマンの卵と呼ぶものである。なぜなら、第一の動かすものは動くはずはなく、それゆえそれを動かないものと見なしたのである。しかしまたそれは物質であるはずはない。さもなければそれは「存在が」証明されなければならないから。それゆえそれを天球とよぶのは誤りである。また昔の人々の中にはその背後に無限の空虚があるとみなすものもいる。またそれが無限の物質であるとみなす人々もいる。しかしアリストテレスによれば、運動する物体の限界の背後には物質も空虚も無い。

アル・ビールニーがインドの宇宙論に大きな関心をもっていたことは、『インド誌』からも伺うことができる。興味深いことに、かれは『ヨーガ・ストトラ』第3章第26節に対するヴィヤーサの注釈において宇宙論がかなり詳しく論じられているのを知って、アラビア語訳において、例外的にストトラだけでなく、「ヴィヤーサ」の名前をあげて、注釈部分も翻訳しようとしている。

6- 2- 3 カシミールにおける伝統的な暦

カシミールでは、インドの年について同じようなものが用いられる。それは白樺の巻物でインドの諸都市に持ち込まれる。それは「ティティ・パットリー」すなわち太陰日の暦と呼ばれるが、必要なこととつまらないことが混ざっており、使う上では正確さを欠き近似的である。われわれの国における使用について言えば、見る人の右から最初の欄には、アブジャド数字で曜日が、すなわち（アラビア文字の）「アリフ」は日曜日の印、「バー」は月曜日の印、以下「ザイ」が土曜日の印である。そして七曜日が完了すると「アリフ」に戻る。第2欄には、1から始まり小の月なら29で大の月なら30で終り1に戻るアラビア人の月の日がある。

かれは『年代学』を著した頃はまだインドの暦については詳しい情報を得ていなかったのでインドの暦についてはあまり触れていないが、『占星術教程の書』になると、インドの暦や占いについても貴重な情報を与えてくれる。

註

¹ 本稿の多くは矢野 [2004] ですでに述べていることをお断りしておきたい。

² 『カーラ・サンカリタ』(Kala Samkalita) [1825] 参照。

³ 矢野他 (訳) [1984: 152-154] および矢野 [2004: 89-93] 参照。

⁴ 風間喜代三、1978、『言語学の誕生』、岩波新書、139-141 頁。長田 [2002] の 17 頁にも引用。長田によれば、このときジョーンズはサンスクリットを学び始めてまだ4ヶ月。ジョーンズの仕事と生涯については、長田 [2002] 参照。

⁵ 最近出版された平岡聡、2007、『ブッダが謎解く三世の物語』上・下（『ディヴィヤ・アヴァダーナ』）、大蔵出版は「全訳」とあるが、『シャルドゥーラカルナ・アヴァダーナ』については、「第33章 古代インドにもあったストーカー事件」というタイトルで今生の物語だけが和訳されており、天文学・占星術を語る後半部の前世物語は省略されている。この物語に題材を得た幸田露伴の『プラクリチ』（岩波文庫『連環記』所収）は「恋愛は破壊をつかさどるものである」からはじめ、身分の

異なるものの恋愛の激しさを見事な文体で語っている。「スーカー事件」では誤解を与えるだろう。

⁶ SKA, pp. 18-19.

idaṃ punar vacanaṃ śrutvā brāhmaṇasya puṣkarasāriṇas triśaṅkur mātāṅgarāja idam avocat/
yathā bhasmani sauvarṇe viśeṣa upalabhyate/
brāhmaṇe vānyajātau vā na viśeṣo'sti vai tathā//
yathā prakāśatamasor viśeṣa upalabhyate/
(略)

brāhmaṇa yonito jātāś caṇḍālā api yonitaḥ/
śreṣṭhatve vṛṣalatve ca kiṃ vā paśyasi kāraṇam//
(略)

māṃsaṃ khāditukāmais tu brāhmaṇair upakalpitam/
mantrair hi prokṣitāḥ santaḥ svargaṃ gacchanty ajaiḍakāḥ//
yady eṣa mārgaḥ svargāya kasmān na brāhmaṇā hy amī/
ātmānam athavā bandhūn mantraiḥ samprokṣayanti vai//
(略)

brāhmaṇai raudracittais tu paryāyo hy eṣa cintitaḥ/
māṃsaṃ khāditukāmais tu prokṣaṇaṃ kalpitaṃ paśoḥ//

⁷ SKA, p. 12.

atha triśaṅkur mātāṅgarājāḥ śārdūlakarṇaṃ kumāraṃ pūrvajanmādhītān vedān adhyāpayati
sma. yad uta sāṅgopāṅgān sarahasyān sanighaṇṭakaitābhān sāksaraprabhedān itihāsapañcamān
anyāni ca śāstrāṇi bhāṣyaṃ ca yathādharmam vedavratapadāni/

⁸ この問題については 2009 年 7 月末にブダペストで開催された第 23 回国際科学史学会で、
“Buddhist Astrology in its Cultural Context — With Special Reference to the Nakṣatra
System —” と題して発表した。この例に限らず、多くの仏教徒は「元パラモン」であったと思わ
れるが、いったん仏教徒になると、差別の対象になり、パラモンとの接触は難しくなったのではない
かと思われる。後の時代、8 世紀にパラモンから仏教へと改宗した不空 (Amoghavajra) もそのよう
な人物であっただろう。かれの『宿曜経』を見る限り、仏教徒として南インドを旅行したとき、最先
端の占星術の知識を手に入れることはできなかったようだ。

⁹ 8 世紀に一行が編纂したと言われる『梵天火羅九曜』の「火羅」は、「ホーラー」の音訳である。

¹⁰ mleccā hi yavanās teṣu samyak śāstram idaṃ sthitam/ṛṣivat te' pi pūjyante kiṃ punar
daivavid dvijah//

¹¹ Kitāb fi taḥqīq mā li-l-Hind. E. Sachau の英訳、Alberuni's India 参照。

¹² Sachau, op. cit., p. 170.

¹³ Sachau, op. cit., p. 137.

¹⁴ Kitāb al-taḥfīm li-awā'il šinā'at al-tanjīm. この書物については、矢野 [1993] 参照。なおこの書の
和訳については、山本・矢野 [2010] 参照。3 回に分けて全訳を刊行する予定。

参考文献

長田夏樹、2002、『新インド学』、角川書店。

矢野道雄、2004、『星占いの文化交流史』、勁草書房。

矢野道雄、1993、「アル・ビールニー『星学入門』に見られるインド」、『西南アジア研究』、38、56-71頁。

矢野道雄・杉田瑞江(訳)、1995、『占術大集成』、平凡社東洋文庫。

山本啓二・矢野道雄、2010、「アブー・ライハーン・ムハンマド・イブン・アフマド・アルビールニー著『占星術教程の書』(1)」、『イスラーム世界研究』、3-2、303-371頁。

Otto Neugebauer, 1969, *The Exact Sciences in Antiquity*, New York: Dover Publications, (矢野道雄・

齋藤潔訳、1984、『古代の精密科学』、恒星社恒星閣)。

Śārdūlakarṇāvadāna (SKA), ed. by Sujitkumar Mukhopadhyaya, Shantiniketan, 1954.

Bṛhatsaṃhitā, ed. Avadha Vihāi, Tripāṭhī, Varanasi, 1968.

やの みちお ●京都産業大学文化学部